婦人と新社會

山田わか主筆

新年號

天才と狂人

メルツ博士の哲學

學者として實業家としてのメルツ博士

畧傳

博士の私生活

アームストロング大學と博士

學理と實際

博士の著書及び「十九世紀に於ける歐州の科學及び哲學思想史」の沿革

大正九年二月二十三日第三種郵便物認可
大正十五年十二月二十三日印刷納本

毎月一回一日發行　第八十二號　大正十六年一月一日發行

東京 婦人と新社會社：發行

天才と狂人

天才と狂人を區別することは或る場合に於ては非常に困難である。此　困難はプラトーをすら大いに苦しめたと云はれてゐる。

と云ふのは、まことの躁狂をしてゐながら世間から狂人あつかいをされる者がいくらもあると同時に、外形から見ると如何にも天才のようで、シカツメらしい堂々たる文字を並べたり、トッピな繪を描くが實は何にも生命のないことを云つたり書いたりしてゐる者がいくらもある。

こう云ふ人物を西洋ではボヘミアンと云つてゐる。こう云ふ人間の共通な點は、髪を長くしたり、勞働者と伍したり、キチン宿にとまつたりすることである。

勿論、非常に欲怒な創造力に富んだ者は人があくせく働いてゐる中にゐては落し付けないで、そして、一生流浪してゐるのも亦事實である。

が確かに、相當の能力をもつてゐて其の日／＼を送るための一定の仕事には適しない人間が相當にある。

さう云ふ人間は、どうかこうか食ふことはできるが、そして、さまよい歩き自分のしたいことをしては居るが、併し、きまつた仕事に落ち付くことができない結果、所謂藝術家の放浪者となつてゐるのである。

これは今日までの所謂似而非な天才の實狀であるが、此の頃は、思想界にも此の似而非天才が現れて來た。そして、中にはまぐれあたりで相當に贅澤をする程の收入にありついてゐる者もあるが、併し、これは他の食ふや食はずの似而非天才の中で富くじの當選者のようなものである。

そして、唯それだけですむならば、別に問題にする必要はないが、併し、彼等が思想のマッチをもてあそぶことが、やがて、大火事をひき起しはせぬかが恐ろしいのである。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

メルツ博士の哲學

大正十二年の本誌七月號「編輯を終つて」のうちに、私共は大部なもの「十九世紀の思想史」の反譯に取りかゝつてゐると云ふことを書いて置きました。その時には丙立社から出版することになつてゐまして、極力反譯を急いで居りました處、あの大震大火のために丙立社からの出版は不能になつてしまいました。その後世界文庫刊行會が出版を引き受けると云ふことになつて其の運びを取つたのでしたが、これも亦震災後の財界不況がたゝつて破約の運命に陷りました。從つて反譯は中絶してゐました。

暫くの間の私共の努力が水泡に歸することは深くあきらめも致しますが、それでは原著の反譯權を下さつた原著者の子息に對して申わけがないことになり、引ひては我が日本出版界の信用にもかゝはるようになることが、以來私共の大きな惱みとなつて居りましたが、此の度、有島健助樣の御親切な御盡力により博文館が引き受けて下さいまして、遲くも、來春から次ぎ〱に出版されることになりました。此の本の内容に付て、及び、此の本を反譯致します私共の抱負に付て書く餘白が御座いませんから其れは又他の機會にゆづるとして、とにかく、此の本の著者なるメルツ博士を本誌に於て本誌愛讀者に御知らせしたいと存じまして、博士に付ての記事をもつて本號の全部を埋めることに致しました。

科學と宗教との調和がメルツ博士にとつては哲學の主もなる問題であつた。そして、此の問題の答へとして博士は「宗教及び科學」と云ふ一論文を發表したが、併し、それは單に學問と

してばかりでなく、博士自身の生活にとつての根本問題であつた。

　なぜなら博士は宗教家であると同時に現代科學の理論と方法を一生涯研究した人であつて、そして、哲學は博士のためには宗教と科學の間の爭ひを增大するものではなく、宗教と科學を結び付けるものであつた。別言すれば、宗教の眞諦を自由研究の不羈の進歩と調和させることつまり、一方に於ける組織的思想の範圍と他の一方に於ける自分の信念の範圍とを結び付けようとしたのである。猶云ひ直せば、如何にして價値の世界をもの丶世界に實現し得るかを示さうとしたのである。

　そして、此の問題に對する博士の最後の言葉によれば、彼は哲學の仕事を三重のものと定義を下してゐる。第一に哲學は科學、藝術、道德の三ツの獨立なる思想を統一し、第二に、哲學は宗教の可能性を證明し、そして、第三には、

哲學は社會の道德的構造を支へるための宇宙觀及び人生觀を造らねばならぬものだと云つてゐる。

　こう云ふ斷定を博士が下したのは、現代の實に深き道德的動搖を强く感じて居たからである。

　既成の社會的經濟的秩序の强固を望むならば一般國民が彼等の位置に滿足し、義務を忠實に守らねばならぬ。不滿は義務觀念の敵であるとメルツ博士は考へてゐた。そして、博士は心のうちでは、現代の社會的及び經濟的不安の大部分は既成の社會秩序に缺陷があると云ふよりもむしろ、現代人が追求してゐる間違つた道德的價値に原因すると考へてゐたらしい。

　現代のように廣く擴がつた精神的不安を救濟しようとする哲學者の言說は民衆の心に達しないのだからそれ等の不安を除去し得るや否やの疑ひがあつても其れは哲學者の罪ではない。哲

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

學者は恐らく、今、相爭ふてゐる人間の情慾の嵐のうちには、ウエルスが描いた「ビショップ」よりも、彼等がより無力であると云ふことを承知してゐる。

基督教會のような有力な團體ですら産業界に平和を齎すことが出來ず、世界戰爭を喰ひ止めることも出來ずアイランドに度々起る暗殺を阻止することも出來ないならば、どうして哲學が、又、哲學者がさう云ふ問題に對して有力であり得るだらうとメルツ博士は歎息をもらしてゐる。

とは云へ、博士は、人類の道德上の生れかはりを實現する最高の力は哲學であると云ふ信仰を持つてゐる。

文明の初期に於ては、人間關係を組織する道德の土臺を限定する仕事は宗教に依賴されてあつた。けれども、社會が進歩するに從つて其の仕事は哲學に依賴するようになつたと云ふ此の言葉によつてもメルツ博士が自分自身に哲學者と産業組織者とを總合してゐたことが分る。

次に、哲學の仕事の範圍を道德の範圍に迄延長したこと、つまり、宗教と科學の統一則ち調和を實現しようとしたことが博士の哲學の仕事である。

非常に異つた性質の現象が共通の概念或は法則の下に持ち來たされた時、たとへば、動物が呼吸すること、鐵が錆びることは、石炭が燃へるのと同じ燃燒現象であると云つた時、これが統一の第一の例である。

又、數學的論理學者によつてもう一ッの例が與へられてゐる。たとへば、三段論法はより一般的な微積分の特別の一例である。他の一方から云へば、數學者の空間と數の概念は論理的の要素に分解されてしまう。その結果、數學並びに形式論理の名で今日迄通つて來た學問の共通の基礎、則ち、新論理の設定は統一の第二の例

である。

メルツ博士の言葉を借りて云へば、今擧げた二ツの例は思想或ひは方法の統一の例である。

ショーペンハワーの意志、ハルトマンの無意識、ベルグソンのエランビタール、スペンサーの不可思議は其の統一の型に幾分似てゐる。何となれば、これ等の原則は天地間の凡てのものを一ツの概念の下に持つて來てゐる。つまり其の概念は現象の裏面に横つてゐる本體に名を附けようとしたのである。故に、外部から觀察しようとする人の目に映ずる現象と、凡てのものゝ裏面に横はる本體を內部から見ようとする人の目に映ずる現象との間には差がある。

もう一ツの哲學的統一の型はヘーゲルの論理學によつて代表されてゐる。ヘーゲルにとつては哲學は現象學を意味する。現象としては異つても其の本體に於ては統一されると云ふ統一法である。

が、メルツ博士は此の種類の統一法をとらない。多くの學者の形式的統一に反して、或ひは、それよりは一歩進んで、メルツ博士の統一は人間の經驗に出立した本質的の統一である。

故に、博士の宗教と科學の統一は、彼の言葉によれば、兩方共が人間の經驗を基礎としてゐるもので、其の兩方を人間が必要とする以上は其處に自ら統一があると云ふ。

いづれにしろ、メルツ博士の宗教と科學の統一は二方面から論じられてある。そして、其の一方面は消極的則ち自然科學の哲學に對する批評であつて、其の結論は、宇宙觀を建設するに付て科學は人間の經驗の全部を使用出來ないから其れは不完全であると云ふ。第二の方面は積極的であつて、此の方面に於ては、科學と宗教の心理學上の根を赤裸々にし、そして、此の二ツが人間の心の中に自然に發生し、必然的に成長したものであると云ふ事實を明らかにしよう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

とした。

猶、一歩進んで、宗教には心理學的の根がある故に、宗教は科學を補修すると同時に科學を包含してゐるとメルッ博士は云つてゐる。其處で、博士の科學に對する批評を要約すれば、次の四ッになる。

一、科學は抽象する。則ち、科學は選擇の方法による。けれども、人間の經驗の廣大なることに比較すれば、其れは甚だ狭い選擇である實に、科學と云ふものは人間の經驗の全部を覆ふものでないから其處に宗教に對する餘地が殘つてゐる。と云つて、宗教は單に科學と相並んでゐるわけではない。もし、科學が抽象し、選擇するとすれば其處には共觀の餘地がある。共觀とは凡てのものを一目に見ることであつて、そして、其の共觀が丁度宗教觀である。科學的の研究に於けるもの丶眞の性質の代用としての抽象と、もの丶眞の性質とは異つたものである。

二、科學は解剖する。則ち、科學の方法は最初解剖して、しかる後に總合する。けれども、宗教は宗教其れ自身に我々の經驗の全部をあつめてしまう。故に、宗教の方法は共觀である。

三、科學は說明を求めて、解釋を抗む。云ひかへれば、科學はものを論じて、もの丶價値を無視する。精神的解釋によつて、宇宙間に認識される最高の價値が宗教である。そして、それは禮拜と讃美によつて、現はされてゐる。

四、科學は人格を無視する。これに反して、宗教は神ですらをも人格視する。

メルッ博士の科學に對する此の四ッの批評は一ッにしてしまうことが出來る。則ち、それは科學は抽象なりと云ふことを外の言葉で云つたに過ぎない。

そして、其の抽象化すると云ふことを現代科

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

學に應用すればどうなるかは『十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史』の第一卷及び第二卷に納められてある。が、大體に云へば、抽象と云ふことは科學の取り扱ふもの則ち有形界とか外界とか乃至は物質界と云ふものを經驗と云ふことから切り離して論ずることである。それ等のものは實際には經驗のうちにあるのだが併し、主觀から則ち感情とか興味とか活動とか云ふものから切り離して取り扱ふのである。

勿論、これはメルツ博士の努力の半面を云つたに過ぎない。もう半面であり特に博士が努力された點は、心理學的の立場から、宗教と科學のそれ〴〵の根を人間の心の中に跡つけたことである。かくして、博士の宗教及び科學の調和に對する最後の言葉は、元來同じ共通な土臺の上に載つてゐたものが徐々と分割して行つて人間の心の中で發達したことを示してゐる。

殊に、奇蹟論に於て、メルツ博士は特別の努力を用ひてゐる。食べたいものを食べるのが本能であつて其れが自然法に從つたものだとすれば、食べたくても食べずに居ることは確かに奇蹟である。そして、此の人格上の奇蹟は調和、則ち、人間にはどんな人間にでも詩的思想が漲つてゐる、つまり、人間の心の創造慾から成り立つてゐると博士は云つてゐる。

故に、豫想出來ないような道德上の絶頂に人が登つた時、たとへば、非常な禁慾や、犧牲や忠義が現はされたり、又は、實際問題を解決するに當つて案外な創意や發明が現はされた時、其れは皆奇蹟である。

そして、こう云ふ現象は科學では說明出來ない。

科學で說明出來ないからと云つて人間の心で理解出來ないものではなく、其れは充分に理解出來るものだとメルツ博士は云つてゐる。

勿論、宗教の實感を持つて居ない人に宗教を

證明することは出來ない。宗教的經驗の皆無な人には宗教と云ふ言葉さへも理解出來ないだろう。

故に、宗教は不合理であると云ふよりは宗教は宗教的經驗を持つた人によつて乃至は其れ等の人々の間に於てのみ論ぜらるべきものである。純粹な論理的な證據よりも人間の經驗にメルツ博士が重きを置いたのは其の故である。

先づ、メルツ博士の宗教と科學に對する態度を要約すれば次のようになる。

信仰を理解しようとする、又、理解し得ると云ふ信仰が宗教と科學の統一である。が、理解が先きに來て信仰が後から來るのではなく、信仰が先きに來て自己のうちに土臺を据へて、しかる後に理解が來る。そして、既でに、土臺の据はつてゐる信仰を有識な確信と爲すのである。

故に、メルツ博士の哲學は信仰其れ自身を理解しようとする信仰の働きに過ぎない。

メルツ博士の哲學に於ては共觀力と云ふものが實際の問題を組織し、且つ、解決してゐる。實に、これは偉大なる人物の特長である。理論に於てと同じように、實際に於ても、此の共觀力が渾沌たる狀態に秩序を與へる。で、此の點がメルツ博士の哲學の特長である。古今の哲學思想を共觀して、其の中庸を誤まらなかつた。そして、博士の實業家としての成功も非凡な此の能力に歸因してゐる、博士は實に哲學を實業に結び付けた人である。

故に、メルツ博士の哲學は生きた哲學である殊に、博士は著名な現象、共觀法を心理學上の内觀法及び發生法と同視してゐる。

× × ×

自己と云ふことに付てメルツ博士は次のように云ふ。

自己と云ふ言葉は内觀と社會的意義との二ツ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

の意味を持つてゐる。そして、此の二ッの意味は關係はしてゐるが併し區別して考へることが重要である。で、內觀の方が第一の意味で根本的であり、社會的の方が第二の意味である。が實際に於ては、第二の方が先きに認められる。第一の內觀の方は其の內觀が長く續けられた後に始めて認められる。故に、子供は自分自身を認める前に他人を認める。其處で、自己と云ふ言葉は二ッの異つた意義を持つてゐる。其の一ッの意味は肉體によつて造られてゐる所謂外界の小さな部分である。そして、第二の意味は內外の凡ての經驗及び本來の凡てを包含した意志の流れである。いはゞたましいの靑空である。

　そして、博士は又云ふ。

　我々の自己は我々の心の靑空を各瞬間に造つてゐる我々の經驗の全部と同一のものだと。

　メルッ博士の人間の思想に對する公平なる計算の基礎は論理的であり宗敎的である。此の點に於てはメルッ博士はロックやヒュームの弟子と云ふよりは、むしろ、キャント及びロッツの弟子であると云つた方が適當であろう。

　さて、メルッ博士は彼の大著『十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史』によつて彼の約束の國に到達したであろうか？

　或る意味に於ては、彼は生れながらに既でに其處に到達してゐたが、併し、他のもう一ッの意味に於ては常に其處に到達しようと努力してゐた。

　彼の仕事は莫大であり、しかも、充實してゐたが、併し、彼が考へてゐた仕事と比較すると彼の生涯は短かすぎた。が、彼はしないよりも不完全でもした方がよいと云ふ意味で一生を通じて努力してゐた。

　メルッ博士の場合に於ては、彼の著作の足りない點は彼の生活が其れを補つてゐる。これを博士自身の言葉で云ふならば、終局の本體へは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

思想によつて達せらるべきものではない。だが感じ、生活し、經驗することによつて其處に達する。故に、人間の言葉や考へが及ばない時には藝術と、そして、生きた出來事が其れを補修するものであると。

實に、メルツ博士は彼が書いたよりもより多く完全に哲學を生活した。故に、彼の書いたものゝみを見て、彼の幸福な家庭生活、實業界に於ける成功、及び親族友人に親しまれた彼の美しい聰明な精神を合せて見なかつたならば、或ひは、彼の哲學を讀者は誤解するかも知れない。

學者として實業家としてのメルツ博士

略傳

獨逸のダルムスタツト、ギーセン、ギユーテンゲンハイデルベルヒ、及び、ボン大學に學んだ哲學博士ツヨン・セオドル・メルツはダーム大學から法學博士號を、アバーデン大學からは文學博士號を送られてゐる。

メルツ博士はニユーカツスルに於けるダーム理學專門學校の評議員であり、そして、ニユーカツスル――

學者として實業家としてのメルツ博士

アボン――タイン電氣供給品株式會社の社長であると同時に其の他數種の化學品製造會社の重役であつた。

一八四〇年マンチエスターに生る。兩親は獨逸人であつて父はフイリップ・メルツと云つた。一八七三年アリス・メーリー・リチヤードスンと結婚し、三人の子息と一人の娘がある。

博士の私生活

メルツ博士は實業に興味を持つてゐて此の方面に於

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ても大いに成功し、そして、其の成功は世間から充分に評價されてゐる。博士にとつては博識と云ふことが大切であつた。否、無くてならないものであつた。博士は實業方面に伸びて行けば行く程博學の必要を感じてゐた。

獨逸人なる兩親の遺傳を受けて、其の著しい學究的氣質は周圍の人々に異樣の感をさへ與へた程であつた。

メルツ博士は曾て「英國の教師達は學問を侮辱する」と云つたことがあるが、其れは單なる警句ではなく、或ひは、又、英國の學校教育の價値を疑ふのでもないが、併し、英國の教師達を彼自身に對照すれば、さう云ふ言葉が出て來るのも無理は無かつたのである。

獨逸から英國へ歸へり實業界に入つて以來、誰にでも想像出來るように博士は忙しかつた。種々雜多の問題に時間をつぶされてしまうのであつたが、併し、博士は夜ふかしをすることの代りに、朝早く起きて氣分のスガ／＼しい三四時間を讀書に費すのが習慣であつた。

博士は、又、書物を非常に大切にした。ダーウインは、書物は唯讀みさへすればよいと云ふ調子で、書物其のものに對しては少しも尊敬心がなく、大部な書物になると、表紙を剝いで、小さく切つてポケットへ入れるに都合よいようにして居たと云はれてゐるが、其れ程極端でなくても、さう云ふ傾向の人は少なくないが、併し、メルツ博士は讀書を好むと同時に、書物其のものを非常に尊敬し、大切にしてゐた。

博士の書棚の一ツにカントールの數學の歷史があつたが、これは數學を研究した人は誰でもよく讀む書物であるから、大抵はボロ／＼になつてゐる筈であるが併し、博士の其の本は中こそ擦れて痛んでゐても、表紙は少しも痛んでゐない。彼の圖書室にある凡ての書物が其の通りで、哲學であれ、歷史であれ、文學であれ、傳記であれ、中には鉛筆のしるしなどがあつても表紙はどれもこれも新らしい本と殆んど同じである。そして、これは讀書家の習慣なる寢所へ本を持つて行くと云ふことをせず、早起きをして讀書したことの證據である。

其の日の實務に附く前の早起きの三四時間の讀書は長い間續いた。そして、其の結果が『十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史』の材料の蒐集となり著述となつたのである。

學者であると同時に熱心な實業家であつた博士は營業に關して商人を相手に胸襟を開いて語り合ふことが習慣であつた。

博士は多くの學者が考へてゐるように、營業と云ふものを必要ではあるが嫌やなものだとは考へて居なかつた。つまり、嫌やな必要と見て、目的さへ達せられゝば捨てゝしまうと云ふ風に實業を見てゐなかつた。實業に對する彼の興味は潑剌としてゐて眞面目であつた。つまり、實業と學問が彼の公的生活であつたと同時に彼の私的な親しみある每日の生活でもあつたのである。

メルツ博士のもう一ツの、そして、重要なおもかげは彼の非常に深い宗教的の性質であつた。その宗教的生活と學問と實業とが打つて一丸となり彼の著述となつてゐる。故に、彼の著述は普通の學者の眞似も出來ないものである。

彼が正しい人であると云ふことは既でに知られてゐたが、併し、彼が八十歳の高齢に達して視力が衰へて來た時に、如何に彼が忍耐強くもあるかと云ふことを人々は知つた。則ち、彼は視力が衰へても彼の仕事及び研究に對する興味を少しも減ずることなく、依然と其れを續けてゐた。

冬ならば書齋のストーヴの傍に毛布にくるまつていつも讀んだり書いたりしてゐた。又、氣候が暖かい時には彼が非常に好んでゐた庭園の中で相變らず讀んだり書いたりしてゐた。彼が彼の愛する庭園に於て讀書したり思索したりすることは、それが直ちに彼の精神生活の寫眞である。

何となれば、新らしい、又は、古い、けれども、要のない記憶の繪の一切を其庭にひろげて批評し、整理し、そして、それに自分自身を付け加へてゐたのである。

アームストロング大學と博士

（ローヤル・ソサイエテーの一員
アール・エー・サンプソン著）

メルツ博士はアームストロング大學の評議員の職に

在ること殆んど四十年に及んだ。博士が評議員となつた當時、此の大學は全體が非常に貧弱であつて、校舎の如きは十二年間も假普請のまゝであつた。博士は其れを引き受けて、大學の負債を整理し、ツイにはより廣い地所を選定して永久的な大學校舎を建築した。以來、同大學は財政狀態から教務狀態に至るまで順調となり今日に及んでゐる。

此の大學に關して特に注意すべきは、メルツ博士が「十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史」を準備するに用ひた科學及び哲學に關する書籍の全部が此の大學に寄附されてあることである、同大學の圖書館はメルツ博士の寄附を發端として今日の立派なものになつたのである。

メルツ博士に關して、どうしても見逃がしてはならぬ事柄は、博士が一生を通じて化學工業にかゝはつて居られたことである。グラスゴー並びにタインサイドに於て、博士はサーシス硫黄工場及び銅工場を經營してゐた。且つ、又、エパン——オン——タインに於てコールター染料製造にも從事してゐた。故に、實業方面の或る一部では博士を化學品製造家と見てゐた。

博士は獨逸ギユーテンゲン大學に於て化學を研究した人である。彼は、實に、有名なベーレル博士の高弟であつた。ベーレル博士は尿素の發見者として有名である。この發見が動物生産研究所の準備となり、總合有機化學の基礎となつたのである。

ベーレル博士はベルゼリアスの弟子である。そしてベーレル博士はリービツクと共同し、ツイに、今日の化學の基礎を築いた。

メルツ博士は、それ故、化學の基礎を築いた偉大なる化學者の直系である。彼の大著「十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史」の第一卷が化學を研究する人々にとつては化學々説の發達の申分ない參考書であることは云ふまでもない。

（理學博士フイリツプス・ベフドソン[illegible]

學理と實際

知識の廣い範圍を持たない哲學者則ち一ツの問題にのみ沒頭する哲學者をメルツ博士は尊敬しようとしなかつた。ベーコンが數學の重要さを認めなかつたこと

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を博士が摘發してゐるのは其の一例である。

博士が英國に於ける哲學と一般文獻との間の密着な關係に非常な價値を置いてゐたことは明らかである。故に、博士は、哲學は英國の實際問題並びに英國の文學趣味とかたく結び付いてゐると云つてゐるが、併し、私の感ずる處によれば、其れがさうなるに付てはメルツ博士自身の生活と仕事との密着な結び付きが大いに與つて力があつたのである。

英國の文學が英國の哲學に及ぼした勢力は、英國哲學者の思想を獨佛の哲學者の思想よりも大いに民主々義的に爲したことであつた。そして、英國の哲學の特長が健全な常識であると云ふことは、英國の哲學が高度な專門語に於て高度な抽象的な問題を論ずる少數の專門家に哲學が限られてゐなかつた故である。

「私は考へる。故に私は存在する」と云ふよりも「考へることが存在することである」と云つた方が本當だろうとメルツ博士は提議してゐるが、思ふに、博士がさう云ふのはさう云ふような考へが常に彼の心にあつたからであろう。彼の此の改訂は彼の全く利己主義でないこと丶一致してゐる。そして、これは、唯、眞理と愛とをのみ目標としてゐる博士の云ひさうなことである

數年以前、私は、メルツ博士とそれから農夫の一團體と共にコツクル公園を巡回したことがある。博士は此の公園内の農事試驗に付て、其の實驗の明らかなる結果は農業の改良となり、農產物や獸肉の增加となることを農夫等に示した。そして、農夫等が其の實驗を故鄕に歸つてから應用する決心を表した時に博士は非常に滿足であつた。これによつて見ても博士が學理のみならず、如何に實際に重きを置かれてゐたかゞ明らかである。そして、此の氣持ちを哲學的に云ふならば、則ち、宗教と科學の一致である。

（理學士ダグラス、エー・ギルクライスト教授寄稿）

博士の著書及び「十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史」の沿革

「ベーコン―文化史に於ける彼の位置―」一八六四年出版。

「現代に於ける哲學と其の仕事」ハイデルブルグ大學

在學中。

「認識論と論理の關係」ギューテンゲン大學に於ける博士論文。

「キャント哲學の研究」。

「キャント以後の獨逸哲學の歴史」ギューテンゲン大學に於ける講義。

　これ等の著述の後メルッ博士はバーゼル大學の敎授に任命された。けれども、一八六六年、病氣の故をもつて辭職されたが、それは病氣の故ばかりでなく、學識の不足を自覺されたのも一ッの理由であつた。

　英國へ歸つてからはいろ〳〵の關係から、獨逸留學中に學んだ高度の科學的知識を、丁度英國にだて始められたばかりの化學及び電氣工業に應用しようとする心持ちになつて、其の方面に努力した。以來、產業組織者、產業經營者として活動した。

　けれども、哲學に對する興味は少しも減ずることなく、實業に活動最中、則ち、一八七七年に、エドワードケーアド著「キャント哲學の批判」を批評してマクミリアン雜誌に發表した。又、一八八三年には大英百科全書第九版に「ロッツ論」を寄稿してゐる

　忙しい實業に從事しながら、一八八四年頃から前項「博士の私生活」のうちにもある通り、毎朝三四時間づゝ讀書したり研究したりした後に、則ち、十二年後の一八九六年に「十九世紀に於ける歐洲の科學及び哲學思想史」の第一卷が現れた。そして、一九〇三年に第二卷、一九一二年に第三卷、一九一四年に第四卷が出て完成したのである。

　其の後、一九一五年に「宗敎と科學」、一九一九年に「心に關する一論文」が現はれ、それから「新哲學」と云ふ論文があつたが、これが完成せずに一九二二年他界されたのである。

　其の外、大學の講義筆記や、雜誌に寄稿された宗敎、哲學、科學に關する論文は無數にあるが此處には略して置く。

本誌臨時定價表

一册	金十錢	送料五厘
六册	前金五十五錢	（送料共）
十二册	前金壹圓	（送料共）

▼誌代及郵税は前金の事▼御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと▼郵券代用は五厘切手にて一割增▼廣告は御照會次第御相談いたします

大正十五年十二月廿三日印刷納本
大正十六年一月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京市牛込區山吹町一九八
印刷人　大杉直次郎

東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會
振替東京五三六八八番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN